

Title	慶應義塾における蓑田胸喜：福沢諭吉論を中心に
Sub Title	The activities of Minoda, Muneki at Keio-gijuku : focusing on the discourses about Fukuzawa, Yukichi
Author	白石, 大輝(Shiraishi, Daiki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2025
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.41, (2024.) ,p.165- 204
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20240000-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾における蓑田胸喜

——福沢諭吉論を中心に——

白石大輝

はじめに

一九二二（大正十二）年十一月から一九三二（昭和七）年四月まで慶應義塾大学予科教授を務めた蓑田胸喜は、右翼雑誌『原理日本』などを発行し、国体に反する思想を舌鋒鋭く批判したファナティックな思想家として、近代日本史に関心を持つ者の間では強烈な印象と共に認識される人物であろう。これまで彼に対しては強い関心が寄せられ、二十一世紀に入り『蓑田胸喜全集』が刊行されたほか、数多くの先行研究が存在する。⁽¹⁾しかし、戦前期の多くの思想家の人物研究が進んでいるが、蓑田についてはその思想に焦点が当てられるもの

の、彼の生涯とその思想形成についてはあまり顧みられていない⁽²⁾。また、養田自身が慶應の中で重職に就いていないことから塾史研究の文脈でも彼にはほとんど触れられない。本稿では、これまで詳しくは言及されてこなかった養田の慶應義塾奉職時代の活動や、大学やその創立者福沢諭吉に関する養田の認識について明らかにする⁽³⁾。

戦前期の慶應義塾大学にはいくつかの右翼団体が存在したが⁽⁴⁾、養田はそのうちの精神科学研究会の会長を務めた。『慶應義塾百年史』の「塾生と思想運動」の項目には、第一次世界大戦後の時期において、学内では外国の革命運動の影響で左右両翼の思想活動が盛んになり、社会科学研究会や精神科学研究会が組織され、社会科学研究に対しては林毅陸塾長が『三田評論』を通じて、研究と運動を分けて学校では専ら研究に止めることを訓示したことが紹介されている⁽⁵⁾。しかし、このような思想的影響を受けながらも「一般の塾生は義塾の伝統である自由な空気のもとに学生生活を享受し、塾内において各種の自治団体を組織したり、文化団体の統合を行なったり、また体育の面で活動したり、野球の応援に熱狂したりして青春を謳歌していた」と結ばれている。

精神科学研究会や養田の存在が「自由な空気」の中に埋没し、慶應の中では大きな影響力を持たなかったことは確かであろう。しかし、彼やその周辺人物に関する史料からは、彼らの愛塾心やある種の福沢への敬意が垣間見え、大学史の視点で塾内における福沢像の変遷を見る上で非常に興味深い事実を知ることができる。本研究を養田に関する基礎研究、また慶應義塾における思想史に関する研究の一角として位置づけたい。



予科教授時代の蓑田胸喜

(出所)『予科会画報』創刊号
(慶應義塾予科会、
1930年)、3頁

一 蓑田と福沢思想

(1) 慶應義塾への就職

蓑田は一八九四(明治二十七年)年に熊本県八代郡氷川町に生まれ、野津尋常小学校、八代中学校、第五高等学校を経て、東京帝国大学に進んだ。大学では最初に文学部で宗教学を専攻し、卒業後法学部に入り直し、途中で退学した後は大学院に在籍した。

慶應義塾大学予科に教職を得た蓑田は、「論理学」と「心理学」を講じた。⁽⁷⁾ 授業では話が脱線して共產主義批判に転ずることがあったとされ、試験で明治天皇の御製を書く単位がもらえたという逸話はしばしば紹介されるものである。⁽⁹⁾ 蓑田が就職するきっかけとなったのは、歌人である三井甲之が主宰する雑誌『人生と表現』(後の『原理日本』)の同人であった広瀬哲士(文学部教授)の推挙であった。⁽¹⁰⁾ また、広瀬を招聘したのは同じく『人生と表現』に寄稿していた川合貞一(文学部教授)であり、後述するように『人生と表現』を通じて

た人脈が文学部の内部に構築されていたのである。

慶大文学部教授を務めた奥野信太郎は、教員室での蓑田の様子や、彼の学生との関わりを詳細に書き残している。⁽¹¹⁾ 蓑田は自らの考えに共鳴した学生と「原理日本運動の分派みたいな研究会」を形成していたが、授業の合間に学生が黒板に「胸喜」を振った「狂気」の落書きをしていたように、多くの学生は蓑田を嘲笑して反発して

いたという⁽¹²⁾。また、一九三〇（昭和五）年に浜口雄幸首相が狙撃された際⁽¹³⁾に、蓑田が「各教室をめぐって国賊ついに国士によつて誅せられると叫んで歩」き、この行動を島原逸三予科教授が教員会議の席上で非難した際には、顔色を変えて身震いさせながら左翼学生が流布した噂であると弁明したという逸話を挙げて、「氣の小さな、どつちかといえは臆病な善人」であると評している⁽¹⁵⁾。そして、慶應関係者に思想的攻撃を加えなかったことを挙げて次のように続ける⁽¹⁶⁾。

福澤諭吉をはじめ、慶應義塾関係者にはたとえば尾崎顎堂翁のごとく、かれの餌食になり得るものは相当あつたはずである。しかしかれは一言半句もそれには触れることがなかつた。

人々によつてはもつぱらこれをかれの律義、善良に帰している。わたくしももちろんそうとは思ふけれども、氣の小さな律義、臆病な善良と、それぞれ形容詞をつけておきたい。

蓑田が広瀬や川合らに恩義を感じ、それゆえに学内で激しい対立を起こして迷惑をかけないように配慮したという側面もあつたのかもしれないが、後に触れるように、蓑田はマルクス主義の牙城と看做していた帝国大学への批判に重要な意味を見出していたと考えられ、単なる思想の相違だけで攻撃していた訳ではないと考えられる⁽¹⁷⁾。

そもそも、国粹主義者であつた蓑田は、西洋からの影響を受け、合理的で自由を重んずる学風の慶應に奉職することについてどのように感じていたのであろうか。蓑田は慶應を退職する時に、就職時の心境を振り返つて次のように述べている⁽¹⁸⁾。

小生は当初入塾の際福澤全集を読み初めて福澤翁が世間通俗的に伝へられをる如き排外思想家にてもまた拝金主義者にも非ず、その独立自主は常に「一身独立して一国独立する事」といふ如く総合的見地より日本の国家的自主独立を説かれをることを知り心理的動機に於いて明かに日本主義者であり三井氏が規定せられたる「世界文化単位としての日本」の予感的表現者なることを知つてそこに教職を奉ずるに至つたことを意外の思ひに喜んだのであります。

蓑田は思想を同じくする福沢の学塾で働くことを喜び、後に見るように、福沢の言説を多く引用して自説の補強に用いた。奥野が述べたところの「臆病な善良さ」に起因して「一言半句」も福沢に触れなかったとするのは誤りである。蓑田の福沢との邂逅は、彼の職歴にも影響することとなる重要な出来事であった。

(2) 蓑田論文の中の福沢

蓑田の思想の中核には、精神科学⁽¹⁹⁾の領域において物事を概念的に説明することを排除し、人生とは実体験そのものであるため、ありのままに理解すべきとする観念があった。こうした思想はヴィルヘルム・ヴントが示した直接経験の学としての心理学の影響によるものであり、外国由来の理屈で日本を説明しようとすることを嫌った蓑田が、マルクス主義や天皇機関説などを激しく批判したことは既知の通りである。蓑田は国体がいかなるものであるかについて具体的には論ずることはなく、明治天皇の御製の中にこそ日本精神を見出すことができるとして、その拝誦を重視した。こうした蓑田の思想を前提としながら、本項では、福沢の主張がいかなる文脈で蓑田の論稿の中で参照されたのかを見てゆく。

一九二九（昭和四）年三月二十八日、二十九日に開催された中央教化団体連合会第五回講習会における講演内容を刊行した『世界文化単位としての日本』の冒頭には、蓑田が福沢に関心を持つに至った経緯が書かれている。⁽²⁰⁾

福澤先生は西洋思想の崇拜者であるといふやうに常識的に思はれ私はこれはどうしても福澤先生の思想を一つ研究してみなければならぬと感じまして、段々その著書を読んで参つたのでありますが、さうして見ると世間普通に申して居るのは非常に違つて居ることを知り、私自身以前から奉じて居りました思想と福澤先生の慶應義塾建設の精神とが根本の動機に於いて相一致するものであるといふ事を知つて、非常に喜ばしく思つたのであります。

そして、福沢の著作『民情一新』の緒言から次の一節を引用する。⁽²¹⁾

世論皆云く、西洋諸国は文明開化なりと。此言誠に然り。余も亦決して其然らざるを説く者に非ずと雖ども、唯漠然これを文明開化と称して其文明開化たる所以の事実を指持明言するに非ざれば、之を学び之を採用するに当て大なる過なきを期す可らず。〔中略〕西洋の理論決して深きに非ず、東洋の理論決して浅きに非ず。或は其深遠なるものは却て往古の印度に在りと云ふも可ならん。

蓑田は、「文明開化に就いては物質的と精神的とを分つて申すのでありますが、西洋諸国が東洋に比して文

明国であるといふのは精神的方面にあるのではない、この方面に於いては理論、即ち哲学の如きは寧ろ東洋の古代印度の方がモット進んで居る、宗教や芸術の点でも決して劣つて居るのではない」とし、「西洋諸国が文明国であるのは自然科学が発達して、その応用によつて物質文明が進んで居るその点に於ては確に西洋が文明である、併し精神文明に於ては決して東西の優劣を軽々に断すべからず」と強調する。⁽²²⁾

福沢は同著の中で「今日の欧洲各国は人知進歩の為に社会の騷擾を醸し、朝野共に未だ其方向を得ざるや明なり〔中略〕魯西亜日耳曼の警察法も無力なるを悟ることならん」⁽²³⁾とも述べており、蓑田は一八七九（明治十二年）年の段階で福沢がロシアとドイツの革命を予言していたことを評価している。預言が的中したのは「福澤先生が真の文明史観を有しまた各国の歴史と国民性とに対する明確なる洞察力を有して居られた結果であ」とし、福沢のこのような研究こそ真の「社会科学研究」であるとして、「社会科学Ⅱ社会主義学説」と見るマルクス主義者を批判した。⁽²⁴⁾また、「福澤先生は当時の官民一同が西洋文明の模倣に浮身を襲し、また学者が西洋の思想学説に追従これ事として居りましたのに対して先に引用しました如く痛烈なる批判を加へられたのでありますが、その批判の『原理』は明かに『日本』であつたのであります」と述べて、三井や蓑田が「原理日本」と言っているのは「斯くの如き態度を概括した言葉」であるとした。そして、「かくして福澤先生は明治天皇の御精神を真に学問の上に、また文明開発上に実行された最も代表的の一人であつたと信ずるものがございます」と述べ、「福澤先生は明かに日本主義者であつたと断言」している。⁽²⁵⁾

蓑田は、「一切の思想、学術、文明の原理を自国の中に見出す事の出来る国」は、「人類文明の發達に余興する一単位であり、真実充分なる意味に於いて独立国家なる資格を有す」と考えており、「世界文化単位としての日本」とはそのような資格を日本が有していることを示す言葉である。そして、福沢が国家の独立に加

え、學術、宗教、商業、工業の西洋からの独立を唱えたことについて、五十年前に既にこの「世界文化單位としての日本」を自覚していたとして、その卓見を称えている。

また蓑田は、日本の外交のあり方についても、思想學術文化の上に自主独立を実現しなければ自主外交の実現は期待できないとして、『学問のすゝめ 第五編』の一節を引用して、独立の気概が文明の形成に必要であることを強調している。⁽²⁶⁾

国の文明は形を以て評す可らず。学校と云ひ、工業と云ひ、陸軍と云ひ、海軍と云ふも、皆是れ文明の形のみ。この形を作るは難きに非ず、唯錢以て買ふ可しと雖ども、こゝに又無形の物あり〔中略〕真にこれを文明の精神と云ふ可き至大至重のものなり。蓋し其物とは何ぞや。云く、人民独立の氣力、即是なり。〔中略〕人民に独立の氣力あらざれば、彼の文明の形も遂に無用の長物に属するなり。

蓑田は福沢を引用する理由について、慶應に奉職していることを一つの理由として挙げながらも、「真意」としては「卒^{ソウ}先して西洋文明を輸入されそのために一般に西洋崇拜者であると思はれてゐる。福澤先生が事実^{マツ}に於いて決してさうではなく、その思想精神に於いて日本主義者であつたというふことを、現代の浅薄なる拝外思想家に对照せしめて闡明することが、今日決して無意義でないと信ずるが故であ」とし、右のように『学問のすゝめ』を引用したのも、「福澤先生を西洋流の功利主義者、物質主義者或はまた拝金宗の信者^{マツ}宜伝者であつたといふ如く見て居る世間の誤解妄評を破ると同時に、その福澤先生が真意義に於ける精神主義者であつたことを述べんとする」ためだとしている。⁽²⁷⁾

また、『日本精神と科学精神』に収録されている「田辺元氏の応答を讀みて」を見ると、「四、福澤論吉翁の六十年前の西欧文明批判と日本精神の科学的伝統論」と題された項目があり、ここでも福沢は多く引用されている。

まず蓑田は、『世界文化単位としての日本』と同様に、西洋諸国に比べて日本が精神文明において優位である点を、『民情一新』を引用しながら述べている。⁽²⁸⁾そして「人知進歩の為に社会の騷擾を醸し、朝野共に未だその方向を得」ていない西洋文明を以て「我方向の標準に供するは、狼狽の最も甚しき者に非ずや」と福沢が述べたことを紹介しながら、かつて「デモクラ『民政』・マルクス共産主義思想」流行の全盛期に蓑田自身が「盲目輿論」を批判したが、福沢の「文明史眼は一般にも首肯せらるゝの期に際会した」とした。⁽²⁹⁾

次に蓑田は中国に目を転じて、それとの比較で日本の科学的精神を称える。福沢は『時事小言』で、中国は一七九二年から百年近く西洋と通信交易を行ってきたにもかかわらず、「百年の久しき西洋の書を講ずる者もなく、西洋の器品を試用する者」もなく、改進が「緩慢遲鈍」であると述べており、更に日中の西洋文明受容に対する態度を比較して、日本が中国に比して左のように改進の氣風があることを論じている。⁽³⁰⁾

我儒者は大概皆武人の家に生れたる者にして、文采風流の中に自から快活の精神を存し、よく子弟を教育して其氣風を養ひ、全国士族以上の者は皆これに靡ざるはなし。改進の用意十分に熟したるものと云ふ可し。既に改進の資に富み、又これに加るに百年前より医師の中に早く洋書を講じて蘭学者流の一派を成し、純粹の西洋説を主唱して改進の媒介を為したるの功も亦少なしとせず。〔中略〕支那をして近時の文明に移らしめんとするには、先づ其人心の根本を改造せざる可らず。

蓑田はこうした言説を紹介しながら、「日本精神が本来近代の支那思想とは異り、『事情の奥蘊を究めん』とする科学的精神を内在し固有するものなることを闡明したもの」と説明し、日本の優位性を強調したのである。⁽³¹⁾

このように蓑田は、西洋文明偏重を批判し日本の精神的独立が必要であることを説いた福沢を、自身と考えを同じくする日本主義者として認識した。⁽³²⁾

もともと、蓑田は単に福沢を称賛するだけではなく、反論も行っている。岩波茂雄を批判した『原理日本』の記事「津田問題と岩波茂雄氏の責任」の中では、福沢が『時事新報』社説の「学者の議論」の中で「世の真理公道なる者は却て其公論に反対したる少数の異説に在て存すべきやも計り知るべからざるのみか、古来其多数の輿論に對抗したる異説こそ大に真理に適合して社会に新發明を為し洪益大利を貽したるの例甚だ乏しからず」⁽³³⁾と述べてフランクリンやワットの例を挙げている点について、「自然科学上の学説と精神科学上の学説との実社会に及ぼす影響に相違あることを十分に明弁せざりし欠陥」があるとしている。⁽³⁴⁾ また、福沢は、社会の弊風を正そうとする学者に対して、弊風を矯正されることで不利益を被る人々が学者の議論を抹殺したり、訴訟を起こすようなことがあると、これが悪例となり、一言一句が常に裁判沙汰となってしまうことから学者の言論は自由にするべきであると述べている。これに対して蓑田は訴訟を起こすような「お目〔出〕度き暇人」は実際にはいないとし、むしろ「さういふ場合にこそ学者は自己の所信所見のためにもまた国家社会の弊風の矯正、文明の進歩のためにも進んで公議公論を敢て公表すべきではないか」と疑義を呈している。⁽³⁵⁾

(3) 蓑田論文の中の慶應義塾

蓑田は、自らの論稿の中で慶應義塾についても度々言及しており、福沢の建塾の精神と関連付けながらその存在意義を強調している。

長谷川如是閑の大学論を批評する論稿では、蓑田の大学に対する認識が示されている。長谷川は、大学は、中世ヨーロッパにおいてはそうであつたように本来社会的要求の産物であつて、後に国家的要求に応じるものに転じたが、現在の社会情勢においては社会的要求に応えるべき運命にあると予測している。これについて蓑田は、「現日本に於いて官立大学の殊に法文学部がその国家的保護の下に、反つて国家無視の所謂社会的要求に迎合する思想運動の源泉となり、而も事実⁽³⁷⁾に於いてはむしろ社会民衆生活を攪乱毒害しつゝ、あるに對して、私立大学がこれと反對の傾向を示しつゝ、ある事實は、大学の殊に法文学部の如きは官立を廢して私立化する⁽³⁶⁾」ことがその本来の目的を有効に達成する方法なるべきを思はしむるのである」と述べている。長谷川は「わが私立大学は、その創設の動機は、慶應大学及び宗教的の大学は除いては、その動機は国家的即ち所謂官僚的若くは商業的であつたが、その国家的動機によつたものでも、多少の社会的意義をもつてゐたのであつた」と述べているが、⁽³⁷⁾こうした国家と社会を對立的に捉える姿勢を蓑田は否定し、「慶應義塾の目的」や『文明論之概略』などを引用して慶應義塾が「全社会の先導者たらんこと」を目指す学塾であり、福沢が国の独立のために文明の進展を唱えたことを指摘した上で次のように述べている。⁽³⁸⁾

「『国家の独立』を離れて「大学の独立」は求むべくもない。更に国家の独立は国民文化の独立、世界文化

単位の実現を外にしては保たるべくもない。右に引用せし福澤翁の殊に最後の一句「日本の學術商売工業を西洋に離れて独立せしむる事」『時事小言』はこの点を既に明治初年に洞破したものである。日本に於ける「大学の独立」は、総合的創造のいや果に日本の思想學術の外国のそれに対する独立を実現したる者にして始めていひ得るのである。

また、「帝大赤化思想の學術的折伏」と題された憲法学者の美濃部達吉を批判する論稿においては、当時の帝大と慶應の比較が述べられている。⁽³⁹⁾ 美濃部は『帝国大学新聞』に寄稿した「共産党事件に付いての感想」の中で、共産党事件に大学出身者や学生が関与しているのは大学教育の罪であるように思われるが、マルクス主義思想を人々が受容するのは改革思想を受け入れるだけの知識が「開発せられて」いるからであり、特定の学校や教員の教育に問題がある訳ではないと述べる。⁽⁴⁰⁾ 「如何に忠君主義愛国主義の教育が施されたとしても、その教育によつて相当の程度に智識が開発せられた上は、学校以外の他の資料から独立にそれと正反対の思想をも受けいれることが出来る」とする美濃部の言説を批判する中で、蓑田は帝国大学や早稲田大学を引き合いに出して慶應の優位性を論じている。⁽⁴¹⁾

蓑田は、美濃部の論理が正しければ「マルクス文献の閲覧者は悉く必然的に赤化思想家とならねばならぬ」と述べる。そして、帝大や早大からは「比較を絶する程多数の赤化学生を出したのに対し、又其他生徒数千にも充たざる地方の「特定」高等学校に比較して、六千余の学生を有する慶應義塾大学からは殆ど問題とするに足らざる少数しか」赤化学生がいなかったとし、「マルクス主義研究に於ては、むしろ東京帝国大学よりも慶應義塾の方が先鞭をつけ」ていることに加え、忠君愛国主義教育は慶應においては「久しく敬遠」されてき

たことを挙げて美濃部に反論した。さらに、学生による「社会科学研究会」が存在し、学生の広告が事後検閲の下に許されているのも全国の大学で慶應が唯一であろうと述べ、他大学で頻発している大紛擾も存在しないとし、「本紙〔時事新報〕発兌之趣旨」の一節を引用する⁽⁴²⁾。

我学問は独立にして西洋人の糟粕を嘗るなきを欲し、我商売は独立して彼の制御を仰ぐなきを欲し、我法律は独立して彼れの輕侮を受るなきを欲し、我宗教は独立して彼れの蹂躪を蒙るなきを欲し、結局日本国の独立を重んじて、畢生の目的、唯国権の一点に在るものなれば、苟も此目的を共にする者は我社中の友にして、之に反する者は間接にも直接にも皆我敵なりと云はざるを得ず。我輩の眼中、満天下に敵なし又友なし、唯国権の利害を標準に定めて審判を下だすのみ。

蓑田は慶應が他大学とは異なり、赤化していない要因について、右のような「世界文化単位、自立国家日本の原理的信念を確立したる福澤諭吉氏の建塾の精神と、またその現在の「批判」的学風の全体として自ら然らしむるところあるに帰せざるを得ない」と述べている。

このように、蓑田は国家に対する慶應の役割の重要性、福沢の建塾の精神の卓越性を強調していた。彼は学生時代の指導教員であった姉崎正治と折り合わなかったことから、帝大教授となることへの挫折を経験したとされるが、自らの思想と福沢・慶應の関連性を強調したのはそうした挫折を覆い、慶應に身を置く自己を正当化するためであったのか、それとも塾生向けに自身の考えを喧伝するために福沢を引用したのか、様々な推測が可能である。『予科会誌』の記事には「塾祖の建塾精神を忘れたる教師は義塾の教師たる資格なし。実に福

澤先生をかへりみ先生を説かれる人は予科に柴田（二能）、蓑田両先生位のものだ⁽⁴³⁾と書かれ、また蓑田は短命に終わったと思われる学生団体「愛塾同志会」の名譽会員として名を連ねており、そうした事実は福沢への傾倒を物語るものであり、いずれにしても蓑田は単に福沢を便宜的に利用する意図しかなかった、とは言えないのではなからうか。次節で見るように、むしろ蓑田ら精神科学研究会は福沢の継承者を自任していた。

慶應を去った後に蓑田が松田福松との共著で発表した『国家と大学』では、帝国大学の学風は江戸時代における昌平黌の「支那崇拜」の変形に過ぎない西洋模倣であり、「反国体学風」であると批判され、さらに慶應や早稲田大学といった私立大学も大学令制定以後、それぞれの特色が失われて、特に法文経済学部は帝大の学風に影響されているとして批判が加えられている⁽⁴⁵⁾。蓑田は、慶應がマルクス主義の影響が及ばない大学でありつづけるために、いわばマルクス主義に対抗するイデオロギーとしての「日本主義―福沢主義」を慶應の特色として打ち出そうとしていたのかもしれない。

慶應にはマルクス主義批判の有力な学者が複数おり、そうした側面からも蓑田にとつては慶應の居心地は良かったものと思われる。蓑田は慶大経済学部の教員である阿部秀助、小泉信三、高橋誠一郎のそれぞれの研究について福沢の「思想的伝統の正しき余効」が認められると述べており、特に小泉を評価していた⁽⁴⁶⁾、マルクス主義批判において彼の言説を多く引用している⁽⁴⁸⁾。そして蓑田は、自身の思想運動を理解した代表的人物として川合貞一、憲法学者の山崎又次郎と共に小泉の名を挙げているが、小泉は蓑田をいかに評価していたのであろうか。この点は未詳であるが、蓑田が『學術維新原理日本』を刊行した際には小泉に献本しており、小泉はそれに対する謝礼の書簡の中で「不取敢マルクス価値論に関する章を拝読致候処、卑説は其処に説かれ^{ママ}ある高見と一致する所多く会心に存申候」と述べている⁽⁵⁰⁾。また、一九三一（昭和六）年十二月時点での「原理

日本社誌友名簿⁽⁵¹⁾」にも小泉の名が見られることから、彼が蓑田や原理日本社に対して一定の理解を示していたことは確実であろう。

『蓑田胸喜全集 第五卷』には「『原理日本』に発表された蓑田論文のタイトル及びサブタイトルに名前が掲げられた知識人とその回数」と題された表が掲げられている。⁽⁵²⁾それを見ると、創刊から慶應を去る一九三二年までの間にタイトル及びサブタイトルに取り上げられた人物としては、経済学者では高畠素之、猪股津南雄、遠藤無水、河上肇、河合栄治郎、法学者では田中耕太郎、滝川幸辰、美濃部達吉が挙げられている。しかし、同年以降は、経済学者では河合に加えて杉村公藏、矢内原忠雄、法学者では田中、美濃部に加えて、佐々木惣一、宮本英雄、泉二新熊、末弘厳太郎、横田喜三郎、宮澤俊義、一木喜徳郎、渡邊宗太郎、野村淳治、平野義太郎が挙げられ、大まかな傾向として慶應在職中は経済学者に対する批判を、退職後は法学者に対する批判を中心に展開していたといえる。慶應時代におけるこうした傾向は、小泉をはじめとする経済学部の人脈から感化された結果であるのか、興味深い点である。

二 精神科学研究会の活動

(1) 活動の概要

蓑田の活動拠点であった原理日本社の沿革や『原理日本』誌上での言論については多くの先行研究により先鞭が付けられているが、同社と密接な関係を有する慶應義塾精神科学研究会の活動については不明な点も多い。⁽⁵³⁾本項では、塾内で刊行された雑誌等の史料を基に同研究会の具体的な活動について紹介する。

『原理日本』は、休刊となっていた根岸短歌会の機関紙としての系譜を引く宗教・芸術の評論雑誌『人生と表現』の「分化的発展」を遂げたものとされ、『人生と表現』時代からの協力者として、広瀬哲士、小林澄兄、船田三郎（いずれも慶應の教員）、川出麻須美、松本彦次郎らが挙げられ、蓑田が慶應に奉職している縁から、新たに慶應の教員である若宮卯之助、高橋竜雄、飯田忠純が同人として参加した。⁽⁵⁴⁾慶應の学内新聞である『三田新聞』には「原理日本発刊の辞」が掲載されている。⁽⁵⁵⁾

精神科学研究会は、一九二七（昭和二）年四月に、予科学生であった大塚英雄、滝口堯、水野竜介らが創会した学生団体であり、原理日本社の姉妹団体として位置付けられた。『原理日本』は事実上精神科学研究会の機関紙でもあったが、一九三四（昭和九）年以降は独自に雑誌『精神科学』を発行するようになった。⁽⁵⁶⁾

学生自治組織の予科会が発行していた『予科会誌』第一号には、「原理日本社同人」名義で「われらの信」と題する団体紹介記事が掲載されている。⁽⁵⁷⁾ここでは福沢の名は登場せず、「現実経験と思想信条とを芸術的表現によつて直示すると共に、人類思想生活史上に於ける迷信打破事業としての不断思想學術改革を実行して、現在及将来の国際国民生活経営としての政治・社会・経済制度化政策の不断改革に進展せしめんとする」ことが団体の目的として示されている。

そして、精神科学研究会が発足した年の『原理日本』第三卷六号、『予科会誌』第二号⁽⁵⁹⁾には同会の目的が記された「趣意書」が掲げられた。ここではマルクス主義、とりわけ唯物史観は、ヘーゲルの弁証法や、ダーウィンの進化論のような合理的唯物論を人類の歴史・社会生活に適用した「鵠的思想」であり、自然科学万能思想に立脚した社会科学未発達時代の反映産物であるとされている。一方で、ヴェントの心理学は自然科学ではなく、歴史・社会科学・精神科学的方法論による基礎科学として確立したことで学術革命を引き起こしたと

し、そうした進歩的研究から目を背ける頑迷固陋なマルクス主義のような論理主義思想（「灰色の理論」）ではなく、科学研究を参照しつつも実人生の直接経験を基礎として、思想学術と生命生活との全関連を統一する芸術的直観精神を重んずるのが同会の理念であるとする。そして、「人間の智力を過信し最後革命を夢想する如き喜劇的人生観を排して、政治社会生活の不断永久改革を意志し、旧来の神話・宗教・哲学上のそのみならずまた『科学』の名に隠る、ものをも合せて国際国民生活の進展の途上に横^マる一切の迷信障礙を打破して進まんとする」ことを志向していた。端的にはそれは「人類文化史上の迷信打破事業」であり、聖徳太子、親鸞、山鹿素行が儒教や仏教などの東洋文化に対して行ってきたが、同会ではギリシャ哲学やキリスト教を源流とする近代西洋文化に対してもこれを行うことを目指すとする。その上で、「こゝにわれらは我が慶應義塾の創設者福澤諭吉先生が六十年前既にこの事業の先鞭を着けられたることを顧み、今新にこの三田山上の地に思想學術改革を宣言し唱道することの不可思議奇縁を思ひ、稀有の感激に打たる、のである」と述べて、同会は福沢が既に着手した迷信を打破する「思想革命」を受け継ぐものであると宣明しているのである。この「思想革命」は、福沢による「実学」の提唱のことを指すのであろうか（後に見るように、精神科学研究会会員の上領一郎は、迷信打破―実人生の尊重を福沢が述べる「実学」と重ね合わせて理解している）。

右に見たように、『予科会誌』第一号の原理日本社紹介記事には福沢の名がなく、精神科学研究会が発足した一九二七年発行の第二号の同会紹介記事に福沢の名が登場する。また、『原理日本』の創刊号（一九二五（大正十四）年十一月）に掲載された「綱領」が一九二七年十一月をもって改定されているが、その際には、「日本文化史上の思想的偉人戦士」、すなわち外来文化との接触を経験しながらも日本精神の維持のために奮闘した人物として、慈円、吉田松陰と共に福沢の名が加えられている。⁽⁶⁰⁾ 蓑田をはじめ慶應関係者が原理日本社の

創設に深く関与していながらも福沢が途中から「綱領」に掲載されるに至ったのには、蓑田の福沢への傾倒が途中から顕著になったことも要因と考えられ、先に紹介したように、蓑田は慶應に就職した際に『福澤全集』を読んだと述べているが、大正末年から昭和に入った頃に本格的に福沢に対する関心が深まっていったものと思われる。

『予科会誌』第六号の精神科学研究会の「各会だより」の欄においても、「世界文化単位としての日本」と題した文章が掲出され、その冒頭で福沢のモットーである「独立」と同会の主張とを結び付けている。⁽⁶¹⁾

『国家独立』はわれらの福澤先生の建塾精神であつたが、それは祖国日本の無窮生命と現実的威厳とを防護すべき唯一の精神原理であり、日本が世界文化史の開展によつて負へる人道的使命を遂行すべき永久の悲痛宣言である〔。〕個人生死国家興亡は人類生活の運命であるが、われらの史的現実的日本はわれらの内心にいくるところの宇宙であり永久生命であり、そはわれらにゆくべきたゞひとすぢのみちをしめすのである。

『予科会誌』には、精神科学研究会の活動の詳細が掲載されており、第二号の記事によると、その活動は上野直昭『精神科学の基本問題』をテキストとする総合研究と、ヴント『民族精神の諸問題』の読解を有志で行う特殊研究に分けられていた。⁽⁶²⁾ また、第六号の記事を見ると、活動内容に毎週火・金曜の昼休みに蓑田が行う「精神科学講義」⁽⁶³⁾、講演会、研究会、図書出版に加え、「しきしまのみち実習（詩歌創作鑑賞）」⁽⁶⁴⁾「たなすゑのみち実習（簡易健康法手のひら療治）」⁽⁶⁵⁾、「をしもの、みち研究（総合的營養学）」も含まれている。賛助員として

は若宮卯之助、高橋竜雄、常盤大定、加藤繁、広瀬哲士の名が挙げられている。同会や原理日本社主催の講演会は慶應の校地で度々開かれ、『三田評論』の雑報欄や『原理日本』の「編輯消息」などで詳細が確認できる(表1、2)。

蓑田は、日本全国で盛んに講演会活動を行っており、精神科学研究会の学生がこれに同行することもあった。例えば、一九二八(昭和三)年八月には徳島と香川で、また精神科学研究会の学生(大塚英雄、滝口堯、水野竜介)を連れて岐阜、愛知、長野の三県十か所で巡回講演会をしており、一九二九年の八月八日から九月六日まで原理日本社・精神科学研究会合同の夏季巡回講演旅行を行っている。⁽⁶⁷⁾後者の旅行は、九州を一周して観光を交えつつ講演するものであり、精神科学研究会からは大塚、滝口、水野に加え、菅崎三文が参加した。八月二十一日から二十四日にかけては、蓑田の郷里の八代郡を訪れ、母校の八代中学でも講演(明治天皇御製に現れたる日本精神)を行っていた。そして、二十九日に中津市を訪問した際には福沢の旧宅を見学して、小幡記念図書館で福沢に関する座談会を開催し、翌日には耶馬溪を観光している。⁽⁶⁸⁾蓑田らは訪問先各地で三田会の歓迎を受けたようである。

ちなみに、福沢の思想について探求する学生団体として、一九一八(大正七)年より養真会(一九三一年四月に「福沢先生研究会」に改称)と呼ばれる団体が存在した。養真会は藤田式息心調和法を通じて精神修養を行う団体であり、いくつかの大学でも同様の団体が作られたが、慶應においてはその方法への行き詰まりから活動内容を福沢研究に転換し、生前の福沢を知る人物を招いて講演会を開催するなどの活動を展開した。⁽⁷⁰⁾同会は福沢への私淑と批判を交えながらその精神を純粹に探求する団体であり、福沢の思想を重んじつつ、それを論拠としながら「思想學術革命」のための文筆活動を行った精神科学研究会とは性質を大きく異にする。福沢

表 1 蓑田在職中の精神科学研究会講演会

日時	講演会名	講演者	演題	備考
1927.6.1	第一回公開 大講演会	本多熊太郎	国際的三大勢力	大講堂で開催。塾長・ 林毅陸が臨席。
		加藤 繁	隠者	
		蓑田 胸喜	精神科学の革命的任務	
1927.11.1	明治節制定 記念講演会	若宮卯之助		
		黒上正一郎		
1927.12.2	マルクス主義 批判大会	三井 甲之		
1929.4.30	春季講演会	蓑田 胸喜	福澤先生の社会主義論	大講堂で開催。
		三井 甲之	物心関係の哲学的考察としきしまのみち	
		伊東 忠太	造形美術を中心として日本文化 の世界史的価値を論ず	
		山川健次郎	日本国の使命	
1929.5.17	南洋視察 談話会	若宮卯之助	南洋における日支人の経済的勢力	慶大 1 番教室で開催。
1929.11.6	秋季大講演会 (原理日本四 周年記念講演 会)	林 麟		大講堂で開催 ²⁾ 。
		本多熊太郎		
		三井 甲之		
		蓑田 胸喜		
1931.5.5	国際時局 講演会	蓑田 胸喜	米露支帝国主義破邪論理学	新入生歓迎を兼ねた講 演会。大講堂で開催。
		蜷川 新	所謂北洋漁業権問題に就いて	
		加藤 繁	歴史より見たる満洲	
		永雄 策郎	満洲鉄道問題の真相	
		井上 清純	作戦上より見たる太平洋問題	
1931.10.2		蓑田 胸喜	福澤先生の支那論	大講堂で開催。
1931.10.14		近藤 利晴	東西より見たるロシア ³⁾	大講堂で開催。映画 「ロシア五箇年計画実 情その他」を併せて上 映。

慶應義塾における 蓑田胸喜

1931.10.24	満州事変 大講演会	池田 弘	支那の累積排日事実を正視せよ	10月23、24日に大学 27番教室地階で現代 支那政情展覧会を開 催。
		蓑田 胸喜	国際連盟規約前文の根本精神に 基き支那の除名を要求せよ	
		三井 甲之	明治十五年の軍人勅諭の宗教と 憲政常道論の迷信	
		井上 清純	満鮮視察旅行より帰りて国民に 訴ふ	
		建川 美次	満洲事変と帝国の態度	
1932.2.2	時局講演会	徳富 蘇峰		大講堂で開催。陸軍省 提供の満洲事変の映画 も上映。
		荒木 貞夫		
		秦彦三郎 ^カ		

(出所)『原理日本』、『三田評論』、『三田新聞』、『朝日新聞』の記載を基に作成。

注1) 演題が不明なのは空欄とした。

注2) 蓑田胸喜^カ「編輯消息」『原理日本』第五卷十号(一九二九年十一月)、表紙三頁の大会案内記事には、「不戦条約問題にて獅子吼されし前駐独大使本多熊太郎氏現下の国際問題に就て、最近訪米帰朝されし慶大医学部教授加藤元一博士在米同胞問題に就て、また三井甲之氏は新作の長詩朗読をなさるゝ事と相成申候」とあり、林や蓑田の登壇については予告されておらず、加藤は実際には登壇していない。

注3) 「雑報」『三田評論』第四一〇号(一九三一年十一月、二七頁)菅崎三文「編輯消息」『原理日本』第七卷十号(一九三一年十一月)、表紙三頁では、「ロシアは何故「事変」に対して沈黙を守り続けつゝありや」という題目となっている。

表2 蓑田在職中の原理日本社主催講演会

日時	講演会名	発表者	演題	備考
1925.11.7	創刊記念講演会	広瀬 哲士		慶大 75 番教室で開催。
		若宮卯之助		
		飯田 忠純		
		蓑田 胸喜		
1925.12	第二回講演会	蓑田 胸喜	室伏高信氏の『日本論』を評す	
1926.1	第三回講演会	滝本 誠一	福澤先生の日本思想	
		蓑田 胸喜	森戸辰男氏の『学生と政治』を検討す	
1926.5 中旬	第四回演説会	村川 堅固	一考を請ふ	慶大旧ホールで開催。
		水野 竜介	ドストエフスキイの動乱的人生観と祖国愛	
		蓑田胸喜カ	福澤先生の告白的精神と日本主義	
1926.11.19	創刊一週年記念講演会	若宮卯之助	社会科学上の日本主義	慶大旧ホールで開催。
		高橋 竜雄	日本国民性について	
		黒上正一郎	聖徳太子の東洋文化摂取と教化原理	
		蓑田 胸喜	社会主義と国民主義	
1927.2.18		松田 福松	禍乱の根因	慶大旧ホールで開催。
		田代 順一	副島蒼海先生に就て	
		滝口 堯	学生の社会科学研究に就て	
		蓑田 胸喜	宗教と現実問題	
1930.2.10	学術講演会	松田 福松	精神科学の帰結と日本教育者の任務	帝大仏教青年会館にて開催。
		蓑田 胸喜	美濃部博士の詭弁共產主義	
		三井 甲之	子規・漱石・左千夫・節と現代	

(出所)『原理日本』、『三田評論』、『三田新聞』、『朝日新聞』の記載を基に作成。

注1) 演題が不明なものは空欄とした。

先生研究会の会員名簿を見ると、精神科学研究会の会員であった者もいたが、蓑田在職中の時期において明らかにそうであったのは、管見の限りでは大塚英雄のみである。しかし、『原理日本』に掲載された精神科学研究会の広告によると、入会に際して養真会のルームに申込書を提出することが求められていた⁽⁷¹⁾、蓑田が自身の夏の予定を述べている『三田新聞』の記事には「昨夏以来養真会精神科学研究会共同計画の「福澤先生研究」のため「福澤先生の文明論」と題する一論文をまとめる意志です」と記されているなど、密接な繋がりが存在したようである。両団体が互いの活動をどのように認識していたか、興味深いところではあるが未詳である。

(2) 『予科会誌』に見る精神科学研究会会員の福沢論

先に見たように、精神科学研究会においても福沢は重視されていたことが窺えるが、同会の会員が認識する福沢論はどのようなものであったのだろうか。蓑田の慶應在職中の精神科学研究会の主な会員としては、大塚英雄、滝口堯、水野竜介、菅崎三文、宮崎五郎、上領一郎が挙げられ、彼らは『原理日本』にいくつかの論稿や和歌を寄せている。また、彼らは『予科会誌』にも寄稿し、その論題には「しきしまのみち」、『古事記』山鹿素行や親鸞など原理日本社が重視する思想的キーワードが見られ、蓑田への共鳴を窺わせる。⁽⁷³⁾ 彼らの論稿には福沢に言及するものもいくつか見られ、それらのうち大塚の論稿二編と上領の論稿一編を紹介したい。

まず、大塚の福沢論を見てゆく。第一号掲載の「とらはれなき生命の歩み」⁽⁷⁴⁾は、正岡子規と福沢についてとりあげ、理屈偏重を批判してありのままの感情を受け入れるべきとする両者の共通点を論じ、評価するものである。大塚は、子規は理屈を排して写生を勧め、福沢は『尊王論』で「人類を目して理を弁ずるの生物と云

ひ、今世を称して道理の時代と名くるが如きは、人事の一局部に適用す可き言にして、滔々たる世界無数の人は情海の塵芥に異ならず⁽⁷⁵⁾と述べているように、両者は理屈上の迷信を排しようとしたとする。そして、「我々は実人生に対して忠実でなければならぬ。とらはれぬと共に真面目であらねばならぬ。批判的であると共に現実的でなければならぬ。」「とらはれなき生命」とはかくの如き批判的、積極的実行的な現実精神⁽⁷⁶⁾であり、「福澤」先生が強調せられし『独立』の精神も畢竟この「とらはれなき生命の歩み」が人生の事実として実行に現はれた態度を云ふ⁽⁷⁶⁾としている。また、「先生の西洋文明同化の営みも、唯々十九世紀に一斉に興隆して来た各国の潑刺たる国民的自覚とその所産を導入して我国民を刺戟し、その本来の伝統精神の中にひそむ武士道的精神（独立男児の気力）を振り起たしめんとするに外ならなかつた」と述べて、外国への模倣（執着）が福澤の意図ではなかつた旨を論じている。

第二号の「僕らの福澤先生⁽⁷⁷⁾」と題された論文では、主に前号掲載の福澤に関する論稿（大久保満彦「明治思想史の一齣」）を批評し、自身の福澤論を展開している。大塚は、大久保は福澤像を「意地張」で封建制度への「反抗心」がある人間として捉えているが、それだけではなく、福澤が中津藩の上士下士の序列が厳しい環境においても下の身分の者に丁寧に接していたことや、封建制度の中で出世ができなかつた父親を想って泣くことがあつたことなどを見落としてはならないとする⁽⁷⁸⁾。

「大久保が自身の論稿で述べた」「翁に就いてその思想の基底となつてゐる実利主義」といふのも分からぬ言葉だが「資本主義思想を醸生する酵母」であつたり、又「翁の思想が個人主義に立廻り、いまだ相互扶助の社会思想に至らなかつた」り、而も「翁は時に現代の社会主義を奉ずる人々が云ふ如き論を発表し

「など」と云ふのは僕には出鱈目の外的揣摩としか受取れない。「中略」さう云ふのは好んで現代のマルキシスト等がやつてゐる事であるが、それは実に「子曰」を繰返して考証訓話に憂身をやつしてゐた徳川時代の瞑想享楽遊芸学者と軌を一にするものであつて、福澤先生の思想的価値は実にさうしたあらゆる学問的迷信を蹴散らかして『実学』を提唱された点にあつたのである。「中略」「マルクシズムに対する正しき認識はやがては、又社会問題に対する我々の正しき認識ともなる」などと云ふのは実はマルクスも、認識も、社会問題も、何も分つてをらぬ事を暴露してゐる

福沢は、人々の学問への「奴隸心」を打破しようとし、その動機は欧米の自由主義・功利主義だけではなく、福沢の母親の教育や適塾生活で育まれた「実行的平等愛」であつたと大塚は考える。つまり、「唯単に英仏の自由思想の範疇を以て直ちに先生の思想を律することは根本的誤謬であつて、それは単に先生によつて消化されたる食物に過ぎない」のである。また、「先生を「個人主義に立廻り」など云ふのは先生の思想の基底をなす「独立」の精神が全然解つて居ら」ず、「その独立の精神は「友のこゝろ」から生れ出たものであり、福沢が仏教では「即身成仏」だが、自分たちは「即身実業」であると禪僧の釈宗演に対して述べたのは、確固たる「実業」があつたためであるとした。「友のこゝろ」とは「実行的平等愛」であり、「人生随順の信」は「現実に随順してたゞ名も無き民の責務遂行にいそしむ」ことである。そして、国語を用いる和歌を作り、それらを鑑賞することで人々に同胞意識が生じて、人類愛が達成されることが示されている。

上領一郎も「福澤先生建塾の精神」⁽⁷⁹⁾の中で、同様の議論を展開している。上領はまず「平和も人道も一切の思想問題は現実的生活と統合的生命との即ち個人生死国家興亡の問題である」(三井甲之「悲痛平和主義」『新

時代』第三卷一号」という三井甲之の言説を引用して、いかなる人間社会でも国家を離れて考えることはできず、学問も国家または国家観念と無関係ではあり得ないと述べている。上領は、福沢は「学問に国境なし」とする「瞑想観念」を打破して直接経験の学としての実学を提唱し、「価値の基準、国民生活の指導原理を『祖国日本』に求めた」とする。福沢が主張した独立は、個人の独立ではなく、祖国愛に基づく「団体主義的独立」であり、その祖国愛の例として、彼が俗文主義を唱え、「漢文社会の靈場を犯して」日本語を用いた著述活動を行ったことを挙げている（フィヒテの言説などを引きながら言葉の生命価値と思想の生命価値の同一性、祖国愛と国語愛の連関性を述べている）。また、実人生を研究の対象とする態度は山鹿素行にも見られ、福沢の実学的精神は彼のオリジナルではなく、日本思想史の系譜に連なるものと位置づけられるとしている。

上領は、時事新報社説「社会の形勢学者の方向、慶應義塾学生に告ぐ」の「人生の教育は何ぞ独り読書推理の業に限らんや、何ぞ独り学校教場の科目に限らんや。人間万事学問として学ぶ可らざるものなし」という一節を引用した上で、「学問並に教育の一切を『読書推理の業』に限つてをるのは、人間生活現象のすべてを『頭脳の産物』と心得てをるマルキシストの研究態度である」としてマルキシストは空想的産物である書物から現象の本質を求めるが、ありのままに現実を観察してこそ現象の本質が理解できるのであり、そのためマルクス主義は理論を事実として誤認する迷信であるとした。

最後に福沢が、『民情一新』の中で「爰に怪しむ可きは、我日本普通の学者論客が西洋を盲信するの一事なり。〔中略〕一も西洋二も西洋とて、唯西洋の筆法を将て模本に供し、小なるは衣食住居の事より大なるは政令法制の事に至るまでも、其疑はしきものは西洋を標準に立て、得失を評論するもの、如し。奇も亦甚しと云ふ可し⁽⁸¹⁾」と述べた点を紹介し（蓑田もこれを複数回引用し、紹介している）、「我々が国家独立を宣言して福澤

先生建塾の精神を述べるのは只か、る偽新思想に対して学術的批判を加へんが為めである」としている。また、東洋と西洋の文明が交わる日本は世界文化単位であり、日本国民にとつての「日本」とは「人生」そのものであり、「宇宙」、「永久生命」、「信順意志」、そして「日本は滅びず」とする信仰であるとする三井甲之の言説を紹介し、明治天皇の御製を掲げて結んでいる。

これらの論稿を見て分かるように、大塚や上領の中の福沢像は、単なる合理性や学問の擁護者ではなく、盲信的な西洋崇拜を戒め、祖国や実人生を重んずる人物像であり、蓑田が強調した福沢像と同じである。そして、国家と学問が互いに無関係ではないとする点、生命に随順する言葉を思想的生活の象徴として見て国語を重視する点なども、蓑田や三井の思想に見られる特徴であり、大塚らの福沢論は蓑田らの強い影響の下にあったことが想像できる。また、福沢が実証的に世の中の現象を説明することの意味で用いた「実学」という言葉を、上領は人生や人間生活をありのままに把握することと解釈しており、こうした点も原理日本社的な解釈論として特筆すべきであろう。原理日本社や精神科学研究会の慶應予科内部での影響力は際立ったものではなかったと思われるが、こうした「原理日本の言説」と関連づけられた福沢論は、『予科会誌』を通じて塾生に発信されていたのである。

『原理日本』の記事によると、大塚は岩波書店、⁽⁸²⁾滝口と菅崎は大満蒙新聞社、⁽⁸³⁾水野は秀英舎、⁽⁸⁴⁾上領は帝国新報社、⁽⁸⁵⁾宮崎は第一徴兵保険会社それぞれ卒業後に就職している。このように研究会の会員の多くは出版社や新聞社、印刷会社といった文筆に関わる業種に身を置くと共に、継続的に『原理日本』に寄稿する者もあり、蓑田の活動に協力し続けた。

おわりに

蓑田は一九三二年に慶應を退職した。蓑田によれば、彼の思想自体には問題はないが、「経営上」の支障があるとして、塾当局から「これ迄一二回余りに強烈過ぎるから寛和して貰ひたいといふ注意」を受けていたが、「平素自分の遣方が悪ければ何時にても退塾すると言明して参つて来てをりましたことゝて、直ちに辞意を表明した」のだという。彼は、大学の中でも「建学の精神に於いてわれらの主義信念と内奥の心理的動機に於いて最も契合するところ多き慶應義塾」は、「生涯の思出愛着の対象」であるとも述べている。⁽⁸⁷⁾

しかし、一九三二年三月二十四日の『三田新聞』は蓑田の退塾について次のように報じ、蓑田の福沢に関する主義主張が学内で批判され、実質的に追い出される形であったことが述べられている。⁽⁸⁸⁾

昨秋以来「福澤主義」に対する見解を中心として蓑田予科教授と文学部史学科との間に幾分の感情の阻隔を生じて居たが、最近に至つてこの間の空氣が急激に悪化し、塾当局並びに他科諸教授等の調停の甲斐なく、つひに問題は蓑田教授問責運動にまで進展してゐる、かくの如き事態をもたらした原因は同教授がある公開の席上での挨拶中義塾文学部史学科に対する批判にふれて以来、史学科の某教授は同教授に対して面白からず思つて居たが、最近「国家緊急時に於ける福澤主義の価値論」を唱へはじめるや史学科では同教授は「福澤主義」の曲解者でありその主張は真の意味に於ける福澤先生の精神を冒瀆するものであると攻撃するに至つたが、たま／＼塾内でなした同教授の講演「国際連盟を排倒せよ」をきいた倫理科の某教

授が極右的思想なりとして更に同教授の間責運動に加はるに至つた、こゝに於て塾首脳部では極秘裡にこれが処置につき慎重協議を重ねてゐたが、此の際教授間の確執を一掃する為めに、つひに積極的処置に出づる模様であるから、四月早々同教授の辞職は確定的なものと見られてゐる

色々の点から観て三田の名物教授であつた蓑田君の辞職がもし実現されたならば、塾生間にも異常なセンセーションを巻起すであらう

そして、三月二十日に記者が蓑田に辞職について聞きに行つたところ、蓑田は次のように語つた。⁽⁸⁹⁾

僕は個人的感情や自身の手落からやめるのでは決してなく、僕の主義、主張を貫徹しようと努力したまでのことで、真理のためにはあくまで忠実ならんとする僕の学究的良心と、氣質からやめることに決心したまで、ある、僕は福澤主義をこの国難打開のために生かそうと思つてゐる、福澤先生のえらい所は、旧時代打破、新時代開拓に努力し、一世をリードして時代の転換を促進せしめた所にあるが、今の塾にはその氣風がない〔一〕不幸にして僕の主義主張が義塾に容れられなかつたが、徳富蘇峰氏等僕を理解、共鳴して呉れる人達も多いから、捲土出来、これから大いにやる積りである〔改行ママ〕

が僕も在塾十年、友人、知己も出来たし、理解し共鳴して呉れる学生もあるのだし、今去るのは矢張り一寸寂しい

当時の文学部は十五専攻制が採用されていたため、厳密には史学科という括りは存在せず、また倫理科も哲

学科を指すものと思われる。一九三一年の史学科目の専任教授には、占部百太郎、橋本増吉、間崎万里、松本信広⁽⁹⁰⁾がいる。占部は石河幹明による『福澤諭吉伝』の書評を書いており、また蓑田と同じく愛塾同志会の名譽会員となっていることからこの四人の中では、福沢や塾史への造詣が最も深かったものと思われるが、右翼団体・國本社の雑誌『國本』に寄稿していることから蓑田の賛同者であったとも思われるため、「史学科の某教授」は橋本、間崎、松本のいずれかであると考えられる。また、当時の哲学科目の専任教授は、川合貞一、小林澄兄、橋本孝、船田三郎⁽⁹¹⁾であり、先述の通り橋本を除いて蓑田の賛同者であるため「倫理科の某教授」は橋本を指す可能性が高い。橋本は戦後慶應の教育改革において、塾長代理の高橋誠一郎からの信任が篤く、高橋と共に教職員適格審査の委員に就任しており、「極右的思想なり」と批判する言説とも整合性がとれる。

蓑田の退職後、精神科学研究会の会長には川合貞一が就任し、後に同会は他の文化団体と共に、一九四二（昭和十七）年十月に結成された慶應義塾報国団（勤労働員施策として設置された学内の学会、体育会、文化団体を統合する組織）に組み込まれたものと思われるが、いつまで独立して存続したかは未詳である。⁽⁹²⁾

これまで、蓑田の慶應への奉職には特段の意味が付与されてこなかったが、思想面・キャリア面に大きな影響を及ぼした福沢との邂逅、マルクス主義を批判する上では恵まれた環境にあったこと、彼の活動を支えた学生と出会えたことは、彼の生涯の中では重大事であったと思われる。蓑田が福沢の思想のみを純粹に塾生に伝えようと意図していたかはさし措き、福沢に私淑して塾生に語るという意味においては、慶應の教員として模範的な姿を示していたといえる。

蓑田の慶應在職当時、福沢の評伝や研究は既にいくつか発表されていたが、⁽⁹³⁾当時から今日に至るまで、西洋文明を紹介し、学問による一身の独立を説いた日本近代化の立役者としての開明的な福沢像が一般的には示さ

れ、それが崇敬の対象となってきたと思われる。しかし、先述のように蓑田や大塚、上領はそうした側面よりも、文明の形ではなく精神を重んじ、日本の独自性を擁護する日本主義者としての福沢を強調しており、そうした「原理日本的言説」を語る一派は一定の支持者を得つつも、慶應の中では塾史や福沢精神を語る主流派となることはできず、むしろ首領の蓑田は福沢論の「曲解者」として扱われたのである。蓑田のレガシーは今日の慶應においてはほぼ存在せず、塾史における肯定的意義は見出されていない状況であるが、戦前・戦中期の学界に大きな影響をもたらした思想家一派が慶應で独自の福沢論を展開していたことは福沢研究史の中に記憶されるべきであろう。

本稿は慶應義塾史への関心に端を発するものであり、慶應義塾における国粋主義的言論活動の実態の一部を明らかにすることを目的としている。今後は川合貞一、小林澄兄、山崎又次郎などの思想について、それらが塾内や社会に対してどのように影響を与えたかを明らかにすることが課題となる。

〔付記〕

本研究は「潮田記念基金による慶應義塾博士課程学生研究支援プログラム」（二〇二二年度）の助成による成果である。

注

- （１） 蓑田を扱う研究は多数存在するが、代表的なものは次の通りである。基礎的な蓑田研究の資料として、石橋一哉『文献 蓑田胸喜』（胡蝶の会、一九九二年）、竹内洋・佐藤卓己・植村和秀・井上義和・福岡良明・今田絵里香『蓑田胸喜全集』（全七巻）（柏書房、二〇〇四年）などが挙げられる。蓑田や原理日本社の思想を探求するものとして、

片山杜秀「原理日本社論のために」慶應義塾福沢研究センター『近代日本研究』第九号（一九九三年二月）、一六五—一九九頁、塩出環「蓑田胸喜と原理日本社」神戸大学大学院国際文化学研究所『国際文化学』第九号（二〇〇三年九月）、一七八—一九四頁、塩出環「原理日本社の研究——歌人・三井甲之と蓑田胸喜」神戸大学大学院国際文化学研究所博士論文（二〇〇四年、未公刊）、塩出環「原理日本社論の限界と錯誤——蓑田胸喜と原理日本社をめぐる諸問題」神戸大学国際文化学部日本文化論大講座『日本文化論年報』第十一号（二〇〇八年三月）、一三二—一五四頁、竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』（柏書房、二〇〇六年）、植村和秀『日本——への問いをめぐる闘争』（柏書房、二〇〇七年）、井上義和『日本主義と東京大学』（柏書房、二〇〇八年）、中島岳志『親鸞と日本主義』（新潮社、二〇一七年）、近藤俊太郎・名和達宜編／石井公成監修『近代の仏教思想と日本主義』（法蔵館、二〇二〇年）、蓬田優人「蓑田胸喜の『学術革命』『学術維新』論」東北大学大学院文学研究科『日本思想史研究』第五四号（二〇二三年三月）、九二—一二頁などが挙げられる。蓑田らによる攻撃を受けた人物に関する研究としては、宮本盛太郎「蓑田胸喜と滝川事件」政治経済史学会『政治経済史学』第三七〇号（一九九七年四月）、四九—六〇頁、大島崇「河合事件再考——蓑田胸喜の河合栄治郎「学術的自治無能力」論」神戸大学大学院人間発達環境学研究所『教育科学論集』第九号（二〇〇五年三月）、五三—五七頁、植村和秀「蓑田胸喜の西田幾多郎批判（一）」京都産業大学法学会『産大法学』第三九卷三・四号（二〇〇六年三月）、四一—四二八頁、「同（二・完）」『産大法学』第四一卷一号（二〇〇七年七月）、一—三九頁、野村卓史「三木清の協同主義と蓑田胸喜の三木批判」広島大学文学部倫理学教室・西日本応用倫理学研究会『ぶらくしす』第二〇号（二〇一九年三月）、四三—五三頁、昆野伸明『近代日本の国体論』（ぺりかん社、二〇一九年）などが挙げられる。

- (2) 前掲『文献 蓑田胸喜』や前掲『日本主義的教養の時代』では、彼の青年期に至るまでの経歴について、詳細に整理されている。

- (3) この点について前掲塩出「原理日本社の研究」は、比較的詳しく言及している。

- (4) 永田哲朗編『戦前戦中右翼・民族派組織総覧』（国書刊行会、二〇一三年）、一三八六―一三八八頁には、明治末期から昭和戦中期までの間に慶應義塾大学に存在した右翼団体として十団体が示されている。精神科学研究会の他には、日本学研究会、日本歴史及国体研究会、興亜倶楽部などが存在した。
- (5) 慶應義塾『慶應義塾百年史 中巻（後）』（慶應義塾、一九六四年）、一八九八頁。
- (6) 蓑田は生涯にわたって郷里や母校との関わりを持ち続け、大学時代に帰郷した際には中学での講演を自ら申し出て、行っている。そして、同校の交友雑誌『白鷺』にも寄稿し、また後述の講演旅行で帰省した際にも同校に立ち寄っており、同校は『原理日本』の「誌友」に名を連ねている（昭和六年十二月現在 原理日本社誌友名簿）『原理日本』第七卷十一号（一九三一年十二月）、三二頁。
- (7) 蓑田の在職中の担当科目については慶應義塾『慶應義塾一五〇年史資料集 第二巻』（慶應義塾大学出版会、二〇一六年）、一〇九九頁を参照。高等部本科にも出講した。
- (8) 蓑田の授業の様子についてはいくつかの記録が残っている。ノートが取りづらく、声が大きくて慣れることに苦労した半面、内容は豊富であり、予科二年生には難しい内容であった等の評価がある（慶應義塾大学予科会『予科会誌』第一号（一九二六年十二月）、会報三〇、三七―三九頁）。「学園名物教授を描く」〔十二〕『国民新聞』一九三一年五月十一日、七頁にも甲高い声でマルクス批判を行っていたことが紹介され、学生の間でも印象深い授業であったことが紹介されている。
- (9) 試験で明治天皇の御製を三首書いて出せば及第点を与えた（奥野信太郎「学匪・蓑田胸喜の暗躍」『特集文藝春秋』一九五六年十二月号、五四頁）、明治天皇の御製一首を書いて出せば優をくれた（浅田光輝「特高の弾圧と痛恨の従軍体験」白井厚・浅羽久美子・翠川紀子編『証言 太平洋戦争下の慶應義塾』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三年）、五八頁）、といった噂が聞かれたといい、前掲「学園名物教授を描く」にも同様の逸話が掲載されている。
- (10) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷三号（一九三三年五月）、表紙三頁。

- (11) 前掲奥野、五一―五五頁。
- (12) 前掲奥野、五三―五四頁。
- (13) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第六卷十号（一九三〇年十二月）、表紙三頁において、蓑田は「浜口首相の遭難に就いては新聞紙は全国民的同情が集つたやうに報道しましたが、「男子の本懐云々」の心理分析の表現が公論世界に見えないといふことは、それが現在の如き「殺人的不景氣」を生ぜしめた国民精神の畏縮頹廢の消極的証左であります」とコメントしている。
- (14) 予科で哲学、本科で宗教学を講じた。蓑田とは学問上でも激しい論争を展開していたとされる（「経法便り」『予科会誌』第一号、会報三七頁）。
- (15) 前掲奥野、五五頁。
- (16) 前掲奥野、五五頁。蓑田が慶應を退職した頃に予科に入学し、蓑田に関する話に接する機会があったという経済学者の浅田光輝も、蓑田が慶應の関係者を攻撃しなかったことについて「彼を遇するに寛容だった慶應に恩義を感じてのことか、という感じがしないでもありません」と述べている（前掲白井ほか、五八―五九頁）。
- (17) 尾原宏之『「反・東大」の思想史』（新潮選書、二〇二四年）では、蓑田が津田左右吉を糾弾した件において、彼は津田が本務校である早大に在る分には問題がないが、東大に出講したことが許せなかった旨を語ったとされることから、蓑田は学説よりも帝大（東大法学部）における容共赤化・反国体教育への不満から学者を糾弾していた可能性が指摘されている（二四八―二四九頁）。
- (18) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷三号、表紙三頁。
- (19) 精神科学は *Geisteswissenschaft* の訳語で、自然科学を除く科学全般を幅広く示すものであり、概ね人文・社会科学に相当するものであるが、論者によってその概念は若干異なる。当時の文部省においても自然科学と精神科学という分類で研究補助金を拠出しており、蓑田も研究課題「精神科学方法論（附マルクス主義の根源的批判）」に対して金

- 五百円が交付されている〔塾報〕『三田評論』第三九六号（一九三〇年九月）、四二頁。
- (20) 蓑田胸喜『世界文化単位としての日本』（原理日本社、一九二九年）、一頁。
- (21) 慶應義塾『福澤論吉全集 第五卷（再版）』（岩波書店、一九七〇年）、五頁。
- (22) 前掲『世界文化単位としての日本』、三頁。
- (23) 前掲『福澤論吉全集 第五卷（再版）』、九頁。
- (24) 前掲『世界文化単位としての日本』、一〇―一五頁。
- (25) 前掲『世界文化単位としての日本』、三一頁。
- (26) 慶應義塾『福澤論吉全集 第三卷（再版）』（岩波書店、一九六九年）、五八―五九頁。蓑田胸喜「対露攻勢戦略原理」『日本及日本人』第一九三号（一九三〇年一月）、二九―六二頁でもこれが引用されている。また、蓑田は『三田新聞』の論稿においてもこの引用を用いながら、福沢は西洋文明の輸入者であると共に批判者であり、「日本の国家的独立と文明的精神との擁護者」であると評し（蓑田胸喜「福澤先生の文明論と国家論」『三田新聞』一九二六年五月二十八日、二頁）、夏休み中にこの論稿の内容についての細論を試みたいと述べている（蓑田胸喜「この夏休みはどう暮す」『三田新聞』一九二六年六月二十三日、三頁）。
- (27) 前掲『世界文化単位としての日本』、三七―三八頁。
- (28) 蓑田胸喜『日本精神と科学精神』（原理日本社、一九三七年）、四六―四七頁。
- (29) 前掲『日本精神と科学精神』、四八頁。
- (30) 前掲『福澤論吉全集 第五卷（再版）』、一八六頁。「歴史哲学に基く不易の対支政策原理」（『原理日本』第五卷五号（一九二九年五月）、一―六頁）においても、中国人に比して日本人が優位であることを示す文脈で引用されている。
- (31) 前掲『日本精神と科学精神』、五一頁。

(32) 『三田新聞』における出津甫の記事「思想犯罪を醸す大学教育の欠陥」を批判する記事では、蓑田は、福沢が『学問のすゝめ 第十五編』で西洋文明を盲信することを批判し、「何ぞ夫れ事物を信ずるの軽々にして、又これを疑ふの疏忽なるや」(前掲『福澤論吉全集 第三卷〔再版〕』、一二五頁)と述べている箇所を引用している(蓑田胸喜「福澤先生の軽信輕疑論」『三田新聞』一九二九年十一月二十日、一頁)。

(33) 慶應義塾『福澤論吉全集 第九卷〔再版〕』(岩波書店、一九七〇年)、二〇五頁。

(34) 蓑田胸喜「津田問題と岩波茂雄氏の責任」『原理日本』第十六卷二号(一九四〇年三月)、四四頁。

(35) 前掲蓑田「津田問題と岩波茂雄氏の責任」、四六頁。

(36) 蓑田胸喜「長谷川如是閑氏の大学論」『原理日本』第四卷九号(一九二八年九月)、八頁。

(37) 前掲蓑田「長谷川如是閑氏の大学論」、九頁。

(38) 前掲蓑田「長谷川如是閑氏の大学論」、九頁。

(39) 蓑田胸喜「帝大赤化思想の学術的折伏」紀平正美・蓑田胸喜・池田弘『日本人の進路』(回天時報社、一九三〇年)、七〇―一七頁。

(40) 美濃部達吉「共産党事件に付いての感想(下)」『帝国大学新聞』一九二九年十二月二日、三頁。

(41) 前掲蓑田「帝大赤化思想の学術的折伏」、八三―八六頁。

(42) 慶應義塾『福澤論吉全集 第八卷〔再版〕』(岩波書店、一九七〇年)、七一―八頁。

(43) 「福澤全集抜粋を作れ」『予科会誌』第三号(一九二七年十二月)、一二四頁。

(44) 「各会だより」『予科会誌』第六号(一九二九年七月)、一八三頁。同団体は、塾風の振興を目的とし、福沢の文献的研究、塾風振興策の研究などがその活動内容の中心として紹介されている。

(45) 蓑田胸喜・松田福松『国家と大学』(原理日本社、一九三八年)、二二頁。

(46) 蓑田胸喜「マルキシズムの批判的諸研究(二)」『国本』第六卷四号(一九二五年四月)、五一頁。

- (47) 蓑田は小泉について「マルキシズムに対し随分綿密な批評をされた流石の小泉教授の如きも、価値論とか国家論の批評はされましたが、唯物史観に対する批評は今日に至るまで遂に殆どされたことがない」（蓑田胸喜「総合大学内容化の原理及方策」『原理日本』第十卷五号（一九三九年五月）、一一頁）とも述べており、唯物史観や弁証法といったマルクス主義の哲学的背景の打破を目指す蓑田としては、小泉にも物足りなさを感じていたようである。
- (48) 蓑田胸喜「マルキシズムの批判的諸研究（一）」『同（二）』『国本』第六卷三号（一九二五年三月）、五一—六三頁、四号（同年四月）、四二—五六頁、蓑田胸喜『独露の思想文化とマルクス・レーニン主義』（原理日本社、一九二八年）など。
- (49) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷三号、表紙三頁。
- (50) 「『學術維新原理日本』反響録（二）」『原理日本』第十卷二号（一九三四年二月）、五七頁に掲載。
- (51) 前掲「昭和六年十二月現在 原理日本社誌友名簿」、二四頁。
- (52) 前掲『蓑田胸喜全集 第五卷』、一二〇七頁。
- (53) 概要を説明する記事として岩谷十郎「精神科学研究会」慶應義塾『慶應義塾史辞典』（慶應義塾大学出版会、二〇〇八年）、四六一頁が挙げられる。
- (54) 蓑田胸喜カ「編輯消息」『原理日本』創刊号（一九二五年十一月）、三八頁。
- (55) 「原理日本発刊の辞」『三田新聞』一九二五年十一月十日、二頁。
- (56) 「慶大精神科学研究会「精神科学」創刊」『原理日本』第十卷五号、五六頁。
- (57) 「各会だより」『予科会誌』第一号、会報五九—六〇頁。
- (58) 「趣意書」『原理日本』第三卷六号（一九二七年六月）、三三—三三頁。
- (59) 「各会だより」『予科会誌』第二号（一九二七年六月）、雑報二七—二八頁。
- (60) 「綱領」『原理日本』創刊号、一頁、同第三卷十号（明治節制定記念号）（一九二七年十一月）、一頁。慈田、吉田、

福沢のほかには、聖徳太子、柿本人麻呂、親鸞、源実朝、道元、日蓮、山鹿素行、松尾芭蕉、本居宣長、井上毅が挙げられている。

(61) 前掲『各会だより』『予科会誌』第六号、一七六頁。

(62) 前掲『各会だより』『予科会誌』第二号、雜報二八頁。

(63) 講本として三井甲之『ヴント氏民族心理学研究 附古事記論』（原理日本社、一九二九年）、蓑田胸喜『独露の思想文化とマルクス・レニン主義』（原理日本社、一九二八年）を用いる。

(64) 一九二九年八月に第一回実修会、十一月十四—十六日に第二回実修会が開催された（いずれも慶應義塾内万来舎にて開催。蓑田胸喜『編輯消息』『原理日本』第五卷九号（一九二九年十月）、三五頁、同十号（一九二九年十一月）、表紙三頁）。

(65) 前掲『各会だより』『予科会誌』第六号、一七六頁。

(66) 『滝口高志』と表記されるものがあるが、同一人物か。

(67) 『講演旅行について』『原理日本』第四卷九号、一一頁。

(68) 『原理日本』第五卷七号（一九二九年七月）、一三三頁、同八号（同年八月）、三〇頁にはその旅程が掲載されている。

(69) 蓑田らの中津市での様子は次の通りである（『原理日本社・慶應義塾精神科学研究会夏季巡回講演記（承前）』『原理日本』第五卷十号（一九二九年十一月）、四七—四八頁）。

二十九日……正午中津着、三田会の諸氏に迎へられ昼食後福澤先生旧邸を訪ふ。真夏日のひかりいそぐつ、まじき草葺の家、殊に先生御自作の、その二階で読書をせられたといふあら壁の土蔵を懐しく飽かず眺めつ、そのかみを偲びて今の世のわれらのつとめ軽からざるを思ふ……小幡記念図書館に赴けば、同館事務理事中里真清氏福澤小幡両先生始め当時の人々の惨憺たる苦心を偲ばす諸種の稿本などを示さる。会衆の集合を俟つて大塚、滝口、水野（一）先生の順序にて夫々福翁の思想と関連せしめつ、特に由緒ある本図書館に於てこの座談会を催

されし司会者の御好意に報ゆべく熱心に講演した。

- (70) 小野修三「福澤先生研究会」前掲『慶應義塾史辞典』、四七二頁。養真会（福沢先生研究会）の展開については、慶應義塾大学福澤先生研究会『去来有真——慶應義塾福研・有真寮史』（慶應義塾大学出版会、二〇〇四年）に詳しいが、精神科学研究会との関係については触れられていない。

- (71) 「慶應義塾精神科学研究会事業其他」『原理日本』第三巻七号（一九二七年七月）、表紙三頁。

- (72) 蓑田胸喜「此夏は」『三田新聞』一九二八年七月二十日、四頁。「精神科学研究会 今秋の計画」『三田新聞』一九二七年十月十二日、三頁には「近く「福澤先生研究」という書籍発刊の企がある」と述べられている。

- (73) 例えば、滝口堯「古事記研究に就いての一考察」『予科会誌』第一号所載、滝口堯「山鹿素行の教育論一瞥」（同第二号所載）、滝口堯「人生原理としての『ししまのみち』」、水野竜介「女流詩人端子氏の和歌」、大塚英雄「『ししまのみち』へ」（同第四号所載）、菅崎三文「親鸞の教行信証とヘーゲルの弁証法」（同第六号所載）が挙げられる。

- (74) 大塚英雄「とらはれなき生命の歩み」『予科会誌』第一号、一四八—一九八頁。

- (75) 慶應義塾『福澤諭吉全集 第六巻「再版」』（岩波書店、一九七〇年）、一五頁。

- (76) 前掲大塚「とらはれなき生命の歩み」、一九二頁。

- (77) 大塚英雄「僕らの福澤先生」『予科会誌』第二号、一四三—一四八頁。

- (78) 前掲大塚「僕らの福澤先生」、一四四—一四五頁。

- (79) 上領一郎「福澤先生建塾の精神」『予科会誌』第三号、四—一三頁。

- (80) 慶應義塾『福澤諭吉全集 第十一巻「再版」』（岩波書店、一九七〇年）、一九九頁。この記事は、福沢の談話を社説の形で一九八七（明治二十）年一月十五日から二十四日まで連載したものである。

- (81) 前掲『福澤諭吉全集 第五巻「再版」』、九—一〇頁。

- (82) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷六号（一九三三年九月）、表紙三頁。
- (83) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷六号、表紙三頁、同五号（一九三三年七月）、表紙三頁。
- (84) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第六卷十号、表紙三頁。
- (85) 「故上領一郎氏略歴」『原理日本』第十四卷十号（一九三八年十二月）、四一頁。
- (86) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷六号、表紙三頁。
- (87) 蓑田胸喜「編輯消息」『原理日本』第八卷三号、表紙三頁。
- (88) 「新学期を控へ蓑田氏退塾か」『三田新聞』一九三三年三月二十四日、七頁。
- (89) 前掲「新学期を控へ蓑田氏退塾か」、七頁。
- (90) 「一一各部教職員及学科課程」『三田評論』第四二〇号（一九三三年八月）、五五頁。
- (91) 前掲「一一各部教職員及学科課程」、五五頁。
- (92) 公安調査庁「戦前における右翼団体の状況 中巻」(公安調査庁、一九六四年) には精神科学研究会に関する記述があり、「会員数は昭和七、八年ごろ六名であったが、九年度以降はわずか二名となり、その後約四十名に激増した」(二〇三頁) と述べられている。
- (93) 蓑田が奉職した時代に刊行されていた福澤の代表的な評伝として、田中王堂『福澤諭吉』（実業之世界社、一九一五年）、太田正孝『町人諭吉』（宝文館、一九二七年）、石河幹明『福澤諭吉伝』（岩波書店、一九三二年）、和田日出吉『福澤諭吉と弟子達』（千倉書房、一九三四年）、高橋誠一郎『福澤先生伝』（改造社、一九三三年）、石河幹明『福澤諭吉』（岩波書店、一九三五年）が挙げられる。